

## 総合討議の総括

### 統一テーマ 「ロマンス語におけるアクセント」

川口 裕司  
Yuji KAWAGUCHI

ここでは統一テーマ報告に引き続き行われた総合討議の内容に基づき、<sup>1</sup>「ロマンス語におけるアクセント」が引き起こすであろう諸問題を概観した。統一テーマでは4件の報告があったが、総合討議は大会第1日目に行われたため、以下のコメントには第2日目に発表された長谷川秀樹氏の研究（本誌を参照されたい）については触れていない。

1. 中田俊介（東京外国語大学大学院）  
「韻律特徴によるフランス語文のあいまい性解消について」
2. 山本真司（東京外国語大学）  
「フリウリ語の強勢音節における長母音化」
3. 木村琢也（清泉女子大学）  
「スペイン語における語彙強勢とアクセントの不一致」

報告の1と3は、フランス語とスペイン語の共時態における韻律構造を対象とする。これに対して2の報告は、フリウリ語の共時態を対象としながらも、その共時態がどのようにして生じたのかという通時態にも関連する。したがってここではまず最初に、共時的韻律特徴としてのアクセントを考え、その後に通時的韻律特徴としての強勢（ストレス）について考える。

### フランス語のアクセント構造

ご存知のようにプロソディの研究は、研究者により基本概念の定義が異なり、アプローチが違う。イントネーションの専門家も以下の引用文のように、それを公言して憚らない。

Research on intonation has long been characterised by a number of unresolved basic issues and fundamental differences of approach. (...) (D. Rober Ladd, *Intonational phonology*, Cambridge Studies in Linguistics, 79, 1996, p.1)

ところで、フランス語には弁別的なアクセントが存在しない。したがって以下の議論では、ちょうど文に統語構造があるのと同じように、韻律にもアクセントを単位とする韻律構造が存在するに違いないという作業仮説が、予め設定されていると考えたほうがよい。

中田俊介氏は、最近のイントネーション音韻論(Intonational Phonology)の枠組みを利用し、統語的あるいは意味的に曖昧な文の違いを、韻律特徴の観点から分析した。Pierre Delattre (1966)に代表される研究者によれば、曖昧文の区別は、リズムグループの末尾アクセントの違いによって説明される<sup>2</sup>。これに対して中田は、Jun & Fougeron (2000)の韻律モデルに依拠しながら、リズムグループの初頭および末尾のアクセント構造を音響分析した。中田によれば、Il a peint la jeune fille en noir.が、「彼はその少女を黒く描いた」という意味になるか、あるいは「彼は黒い服の女性を描いた」となるかは、以下のようなアクセント句構造の違いにより説明可能であるという。

<sup>1</sup> 残念ながら総合討議の録音資料はないと聞いている。報告者と質問者の先生方には、浅学の過ちと記憶の誤りを前もってお詫びしておきたい。

<sup>2</sup> Delattreの研究を最近の文脈から整理しなおした論考に以下のものがある。Philippe Martin, "Intonation de la phrase dans les langues romanes: l'exception du français", *Langue française*, 141, 2004, とくに pp.36-40.

Il a peint la jeune fille en noir.  
 [[Hi-Hi L\*][L L H%]] # [[L HiL%]] 彼はその少女を黒く描いた<sup>3</sup>  
 [[LL H\*][L Hi-Hi L L%]] 彼は黒い服の少女を描いた  
 (H = High; L = Low; H\* 句末アクセント; Hi 句頭アクセント; % イントネーション句末;  
 # ポーズ)

このように統語的な曖昧性は韻律句の組み換えによって解消されるが、その場合、曖昧性の解消に関与的な句頭アクセントは、持続時間の伸長ではなく、ピッチの上昇を伴うことが多い。中田の報告に関しては以下のコメントがあった。

#### コメント

原：はたして統語的な曖昧性が韻律特徴だけで解消されるのか。

実験室での音響分析において、どのように曖昧文を録音したのか。

中田：前後の文脈や語用論的条件なども考慮しなくてはならないであろう。録音は文脈を提示しつつ、両文を区別するようにして読んでもらった。

原：今後の課題として、報告者自身も述べているように、実際の言語運用データを対象にした音響分析が必要である。

後者について付言しておけば、Peter Wunderli (1990)も自然な発話コーパスに基づくイントネーション研究の方向性について言及している。<sup>4</sup>

#### スペイン語のストレスとアクセント

木村琢也氏はスペイン語におけるアクセント句構造について報告した。報告はストレス(強勢)とアクセントの概念規定から始まった。木村はストレスを「語彙項目の特定の音節がもつ抽象的な特質」と定義し、その具体的な音声実現のされ方は決まっていないとする。ストレスが抽象的であることは古くから指摘されている。

Rather, as explicitly stated by Weinrich (1954:2) and Lehiste (1970:150), stress is an underlying mental phenomenon, which however must somehow be picked up by the hearer. (...) (p.40)

(Larry M. Hyman, "On the Nature of Linguistic Stress", *Studies in stress and accent*, 1977, Southern California Occasional Papers in Linguistics, No.4, pp.37-82.)

さらに木村は、アクセントをピッチ・アクセントに限定し、「ピッチの変化によるストレスの実現」であるとする。ストレスとアクセントについて言及する際には、おそらく同時にプロミネンスという概念も規定する必要があるように思うが、ここではこれらの概念規定の問題を議論することはしない。ただし、以下のことは述べておく。ストレスもアクセントも、それぞれの言語において、何らかの形で、ある音節に他の音節にはないプロミネンスを与える機能をもつこと。そしてストレスを語彙項目に限定するのは、ストレスの定義が狭すぎると思われることである。

いずれにしても、これら3つの概念を適切に定義するのは困難であり、しばしば同語反復に陥ることになってしまう。たとえばケンブリッジ大学出版の初学者向け入門書の定義を見たい。

Such prominence (variously called stress or accent by different authors – I define my own

<sup>3</sup> もしくは韻律変異として、[[LL Hi L L H\*][L HiL%]] もあり得る。

<sup>4</sup> Peter Wunderli, "294. Französisch: Intonationsforschung und Prosodie", *Lexikon der romanistischen Linguistik (LRL)*, Band VI, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1990. 特に p.35 の以下の部分を参照。  
 "Überdies läßt sich in der letzten Zeit ganz generell eine verstärkte Hinwendung zu spontansprachlichen (und damit eine Abkehr von den vorgelesenen) Korpora feststellen."

use of these terms more precisely in chapter 2) is on one level a feature of words as stored in our mental lexicon (word-stress or word-accent) and on another level a feature of connected speech (sentence-stress or sentence-accent). (Alan Cruttenden, *Intonation*, 2nd Edition, 1997, p.7.)

第2章で同じ著者が提出した定義も決して満足のいくものではない。

In this book I shall use the term STRESS to mean ‘prominence’, however such prominence is achieved. The term ACCENT will be limited to prominences where pitch is involved (hence it is equivalent to PITCH ACCENT). ‘Stress’ is therefore being used in the more general, less specified, way. (Alan Cruttenden, *op. cit.*, p.13.)

ストレスを語彙に限定することは、特にフランス語のような言語では問題があると私は思う。たとえば Cruttenden (1997)はフランス語を解説する中で、次のように述べている。

(...) While French words, for example, regularly have their stress on the final syllable, many words will lose their stress in connected speech and hence stress will only occur at the end of a group of words, e.g.

Les murs de votre maison sont trop noirs.

Hence the occurrence of an accent delimits a word group rather than a single word in French. (Alan Cruttenden, *op. cit.*, pp.14-15.)

語彙ストレスは連続する話線において実現されるものとされないものがあり、余剰的である<sup>5</sup>。フランス語にとって関与的なのは、むしろ語グループの末尾に現われる句末ストレスである。そして中田の報告にあったように、曖昧文の弁別を可能にしているのは、ピッチ上昇を伴う句頭アクセント（ストレスではない！）であって、句末ストレス（中田のいう句末アクセント）ではない。句末に現われる韻律特徴は、ピッチ変化をしばしば伴いつつも、本質的には有意に伸長された持続時間によって実現されるため、アクセントではなく、ストレスと呼び分けることもできよう。

ところで、スペイン語のような自由アクセントの言語では、語は一般に語末から2番目の音節(penultimate syllable)にストレスが置かれるが、同時にストレスの配置は、音韻論的にも、形態音韻論的にも弁別的である（例、termino「私は終える」～ terminó「彼は終えた」）。このような言語を対象とした分析では、ストレスの用語を語彙に限定して使用することは、もちろん当然のことである。

木村はスペイン語のアクセント構造を分析し、関与的な3つのアクセント図式(L\*+H, L+H\*, H+L\*)から外れるものがあることを指摘した。その内の「ストレスがないのにアクセントが観察される」タイプ、いわゆるHLH\*型について、次のコメントがあった。

#### コメント

川上：HLH\*型のアクセント句は、先ほどの中田氏の報告に出てきた、句頭アクセントと関係があるのではないか。

木村：今回の報告では残念ながらフランス語について言及しなかったが、たぶん関係があると思う。

このHLH\*型の存在は、フランス語の句頭アクセントがスペイン語にも存在することを示唆する例としてたいへん興味深い。この句頭アクセントは、スペイン語においてもピッチ上昇として実現されるという。フランス語の句頭アクセントは、Ivan Fónagyが早くから指摘したように、新聞やマスコミに特有の韻律特徴として登場し、その後には拡大していった。木村のあげた例も新聞や天気予報であったというのは単なる偶然とは思えない。

<sup>5</sup> 語アクセント（ストレス）が実現されなくなる現象は「脱アクセント化 désaccentuation」と呼ばれ、ロマンス諸語の中でも、とくにフランス語に特有な現象であるらしい。

Cámp<sup>er</sup> para aten<sup>der</sup> a su fue<sup>rte</sup> y diná<sup>mica</sup> expansi<sup>ón</sup> comercial dese<sup>a</sup> contra<sup>r</sup> dependi<sup>en</sup>tes y dependi<sup>en</sup>tas para incor<sup>por</sup>arlos a su red de estable<sup>ci</sup>mientos en Madri<sup>d</sup>.

上の dependi<sup>en</sup>tas para incor<sup>por</sup>arlos の部分において、強勢はそれぞれ-dien-と-rar-にあるが、木村は de-と-cor-にもピッチ上昇を観察する。つまり de-と-cor-は「ストレスがないのにアクセントのある音節」になる。

このように他の音節に対してある音節にプロミネンスを付与するやり方は、一般に、ピッチ・持続時間・強さが関係すると言われる。ただしこの3つのパラメータが分離不可能な状態で結びついていることも事実である。ここでは伝統的な定義に従い、ピッチによるプロミネンスをアクセントと呼び、他をストレス（強勢）と呼び分けてきた。<sup>6</sup> この考えに基づきつつ、以下ではアクセントとストレスを通時的に考えてみよう。

## ラテン語のアクセント

ラテン語からロマンス語に移行するとき、アクセントも同時にメロディー・アクセントからストレス（強勢アクセント *accent tonique*<sup>7</sup>）に移行したと言われる。<sup>8</sup> 修辞学者の Quintilianus は、ラテン語のアクセントがギリシア語のアクセントほど「心地よくない *minus suaves*」と記しているが、その一節を読んでみると、ラテン語のアクセントがピッチ・アクセントであったことを窺い知ることができる。

*Sed accentus quoque, cum rigore quodam, tum similitudine ipsa, minus suaves habemus, quia ultima syllaba nec acuta unquam excitatur nec flexa circumducitur, sed in gravem vel duas graves cadit semper. (...)* (M. Fabii Quintiliani Institutionis Oratoriae, Liber XII.x.33)

また5世紀の文法家 Servius は「詠うように *adcantus*」という表現を用いてアクセントを説明した。

*Accentus dictus est quasi adcantus secundum Graecos, qui προσωδιαν vocant.*<sup>9</sup>

こうした楽音的アクセントがストレスに移行したのは2世紀から5世紀の間と言われ、5世紀の文法家 Pompeius の用いた「より強く響く *plus sonat*」という表現は、強勢アクセントへの移行の証拠として引用される。

*illa syllaba plus sonat in toto verbo, quae accentum habet* (Pompeius, G.L. V.)<sup>10</sup>

ところで、このメロディー・アクセントからストレスへの移行は、いわゆる母音の長短が非弁別的になっていくのと並行して起きたと考えられている。

Harald Weinrich は、母音の長短が非弁別的になったのは、音節構造の進化と関係するという説を提唱している。<sup>11</sup> 彼によれば、後期ラテン語の音節構造として、CV:-CV と CVC-CV

<sup>6</sup> 両者を区別することの妥当性については、たとえば Ladd, *op. cit.*, p.50 を参照。

<sup>7</sup> 蛇足かもしれないが、フランス語において高さアクセントの存在を否定し、*accent tonique* という術語を提案したのは18世紀の文法家 Dumarsais であったという。Jacques Chaurand, “La découverte de l’accent tonique français”, *Verbum*, 14, 1991, p.223.

<sup>8</sup> Michel Banniard, *Du latin aux langues romanes*, Editions Nathan, 1997, pp.41-42. ただし Edmond Liénard のように、アクセントの本質は歴史を通じて不変であり、常に強勢アクセントであったと主張する研究者もいる。L’*accent latin*, Colloque de Morigny, Publication à l’Université de Paris-Sorbonne, 1982, p.17.

<sup>9</sup> G. Bernardi Perini, *L’Accento latino. Cenni teorici e norme pratiche*, Pàtron, Bologna, 1964, p.5

<sup>10</sup> Max Niedermann, *Précis de phonétique historique du latin*, Paris, Klincksieck, 1953, p.11.

<sup>11</sup> Harald Weinrich, *Phonologische Studien zur romanischen Sprachgeschichte*, Aschendorffsche

の2つのタイプが定着した結果、母音の長短の弁別が余剰的となり、非弁別化したのであった。結果として、ストレスと音節構造による母音の弁別体系が確立する。すなわち、ストレスのある開音節には長母音が現われ、閉音節には短母音が現われた。フランス語を含むいくつかのロマンス語で、この長母音は、ストレスの影響であろうか、二重母音化する(例 PÈDE > pè:de > 古仏語 *pie*, BÔVE > bô:ve > 古仏語 *buf* 等)。ところがフランス語の場合、上記以外の長母音は、その後も長母音であり続け、<sup>12</sup> 後にメロヴィング朝期の二重母音化を経て現在に至る(例 MÂRE > ma:re > \*maer “mer”, PÎLU > pe:lo > peil “poil”. \*SÊRU > se:ro > seir “soir”, SÔLU > so:lo > soul “seul”等)。

### フリウリ語のストレス音節における長母音化

山本真司氏が指摘するように、フリウリ語に関しては、本来は通時論で用いられることの多い「強位置」と「弱位置」の概念が長母音の解釈に適用され、結果として長母音化をめぐる議論は、共時態の中だけにとどまらないものになっている。そのためかフリウリ語について全くの門外漢である筆者には、氏の報告がフリウリ語のストレス位置における長母音化と後期ラテン語の母音の長短の関連を探ろうとするものであったように思えた。

まず配布された資料を見て興味深いのは、後期ラテン語の CV:-CV 構造が、フリウリ語の長母音の系列ときれいに一致していることである(例 NĪDU > nî:t, SĪTI > sêt, NŌVE > nûf 等)。一方、CVC-CV 構造の方は、フリウリ語で短母音に変化している(例 SĪCCU > sec, RŪPTU > rot, FRŪCTU > frut 等)。また RĪPA > rive と SĒRA > sere では、後期ラテン語の母音の長短の区別が失われている。このことから少なくとも後期ラテン語の母音の長短の非弁別化は、フリウリ語においても生じていたと考えられる。したがって、後期ラテン語の長短をフリウリ語の共時的な長母音化と関連づけることには無理があると思われる。

山本は報告の中で、Francescato や Vanelli に代表される諸説を紹介しながら、上記の長母音系列がどのように出現したかを説明する。中でも Vanelli の仮説は興味深い。彼女は「語末の有声子音が無声化し、先行する母音の長さが弁別的になった」と考える

(例) NĪDU > \*nido > \*nid > ni:t  
 SĪTI > \*sedi > \*sed > se:t  
 NŌVE > \*nuve > \*nuv > nu:f

ただし語末子音の無声化がなにゆえ長母音化の引き金になったのかについては説得的ではない。山本の報告に関しては、以下のコメントがあった。

### コメント

小林：単音節語におけるストレスとはどのようなことを意味しているのか。

山本：語源的に2音節であったものが、フリウリ語において強勢音節だけしか残らなかった例がたくさんある。

通常ストレスは、ある音節に他の音節にはないプロミネンスを付与することであるが、単音節語の場合、他に比較すべき音節が何もない。そんな単音節語の環境で、長母音音素の系列が生まれたとすれば、やはり Vanelli の主張する語末子音の無声化に依るのだろうか。<sup>13</sup>

確かに、(AL)LATU > \*lado > \*lad > lât と LACTE > \*late > lat で、語末子音 \*-d/-t の対立

Verlagsbuchhandlung, Münster Westfalen, 1958, pp.18-19.

<sup>12</sup> 語末母音の脱落および二重子音の単音化の後も長母音であった可能性がある。詳しくは川口(1998)「フランス語の歴史を刻んだ音変化」、『フランス語を考える』、三修社、pp.288-298.

<sup>13</sup> フランス語では、単音節語 MĒL, CŌR が古仏語 *miel*, *cuer* ように二重母音化したのを説明するために、これらが実は単音節語でなく、\*MĒLU, \*CŌRU のように2音節であったとする音声学書がある。いかにも理論に合わせた推定形のように思える。

が、前者の無声化によって中和し、有声・無声の対立 (-\*d/-t) が先行する母音の長短 (-ā と -a) に音韻転化したと考えることは、音韻解釈上あり得る。最初にも述べたように、後期ラテン語の母音の長短がフリウリ語の母音の長短と関連づけられる可能性は、既に諸研究によって否定されているという。とすればやはり、フリウリ語の長母音化は、山本の例のように、単音節語における「ストレス音節」あるいは「強位置」と関係づけて共時的に解釈される音現象と言うべきであろう。ただし有声子音の無声化が、なぜ母音の長音化の引き金になったのかに関しては、この音韻解釈はあまり説得力がないように思える。その点の理論的考察がさらに必要であろう。

## まとめ

学会理事の方から、総合討議の司会を持ちかけられたとき、難しいテーマだけに正直どうなるのか不安なまま引き受けてしまった。「ロマンス語におけるアクセント」というからには、ルーマニア語、レト・ロマンス諸語、オック語、カタルーニャ語、ガリシア語、ポルトガル語などが統一テーマ報告の中にあれば、なお良かったであろう。しかしそうならなかったことは司会者の能力を考えると、不幸中の幸いであったとも言える。また、大会当日に3人の方の報告を拝聴し、どうしても共時的なアクセントと通時的なストレスという切り口をその場で見つけることができなかった。そのために拙い司会に終始し、報告者の方々にはたいへん申し訳なく思った。今回、学会誌のための原稿を用意しながら、無い知恵を絞りつつ、3つの報告と討議をまとめてみた。内容については大方のご批判をお待ちしたい。

最後になるが、フランス語の句末ストレスと句頭アクセントについて、気になる記述を見かけたので付記しておく。その一節は、現行の句末ストレスが、実はすでに12・13世紀に行われており、さらに表現的機能をもった新しいアクセントが、ほぼ同じ時期に、句頭に現われていたというものである。『ロランの歌 *Chanson de Roland*』の次の2行がそのことを示しているという。<sup>14</sup>

«Iceste espee porterai en Arabe» (v.2282)

この剣はいざアラビアに持ち帰らん

Dient Franceis: «Icist reis est vassals!» (v.3343)

フランス勢は同音に、「われらが王の猛きことかな、」<sup>15</sup>

残念なことに、あるいは幸運にも、11世紀には音響分析装置がない！ いずれにせよ、句末ストレスと句頭アクセントの関係はたいへん興味深い問題のように思える。

<sup>14</sup> Christiane Marchello-Nizia, *L'Evolution du français. Ordre des mots, démonstratifs, accent tonique*, Armand Colin, 1995, pp.189.

<sup>15</sup>   は句頭アクセントを、  は句末ストレスをそれぞれ表す。邦訳は『フランス中世文学集1』、神沢栄三訳、白水社、1990、p.93, 122による。